

活 動 報 告

共同研究奨励金助成グループ

「東アジアにおける民族主義の歴史的体験とその意味—『プランゲ文庫』を起点に考える」（2013 年～2015 年）

本共同研究は「プランゲ文庫と東アジア」（2009 年—2012 年）の共同研究の第二期事業として継続するものである（「プランゲ文庫研究会」に略称）。以下、共同研究の目的の部分を紹介し、2013 年度の活動を略記する。

「研究目的：①神奈川大学図書館に所蔵されている貴重文献「プランゲ文庫」を起点にしつつ、第二次大戦終了後の東アジアにおける民族主義の歴史体験とその意味を軸とするより幅広い、深度のある研究を目指す。②個々の研究者の関心その他も考慮して、日本の敗戦、連合国軍の占領統治にはじまる日本、南北朝鮮、中国、台湾の各領域の国際的な絡み合い、そこにおけるそれぞれの政治、社会、文化、などの問題を相関的かつ総合的に理解できるような共同研究をすすめる。③できる限り具体的な形で考察を深めていくが、大きくは植民地主義の質的把握、激変する国際関係における脱植民地化の相違、東アジアと非東アジア世界との対比といった問題意識を抱えながら、個別的には、民族主義の歴史体験を国家（権力）と民衆の双方から見つつ、同時に旧宗主国と旧（半）植民地のあいだにおける国際関係および民衆相互間の関係を捉えたい。④個別の研究者の関心にしたがって、より微細に言うなら、上にあげた前提条件のもとに、民族ないしは国民のアイデンティティ形成の問題、統治側における民族ないしは国民の政治・行政的掌握と関連する民族意識・国民意識の造成、在日朝鮮人や華僑と関連する旧植民地出身者ないしは外国人管理の問題、それに「祖国復帰」の形をとった沖縄の問題などについて追究し、全体として、共同研究の趣旨に沿った成果を目指す。」

- (1)『戦後日本と中国・朝鮮—「プランゲ文庫」を一つの手がかりとして』（研文出版、2013 年 3 月）の刊行



論文編	
在日朝鮮人運動と日本共産党—階級か、民族か—	尹 健次
GHQ 占領期日本における朝鮮メディアの世界—機関紙と雑誌に関する書誌的分析	小林 聡明
戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤—救済金問題を事例に	王 雪萍
戦後台湾人留学生の活字メディアとその言論の左傾化	何 義麟
戦後上海日本資産の接収と処理	陳 祖恩

上海の『亜州世紀』が見た戦後日本の政治	孫 安石
日本の新聞・雑誌に見る昭和天皇の戦争責任	朴 晋雨
吉田書簡から日中共同声明へ―捨てられた先達の苦心	田畑 光永
資料編	
在日朝鮮人刊行雑誌（朝鮮語）記事リスト	小林 聡明
終戦直後における中国人日本留学生に関する年表	田 遠
日本に於ける中国関係雑誌記事目録一九四五～四九年	大里 浩秋

(2) 2013 年 4 月 17 日の研究会開催

場所―神奈川大学人文学研究所会議室

報告：(1) 「日韓歴史摩擦の政治学」李元徳（韓国・国民大学日本研究学研究所）

コメンテーター 尹健次，大里浩秋，孫安石，阿部浩己，小林聡明，泉水英計

(2) 日本学術振興会・日韓共同研究「冷戦期日韓におけるアメリカ」の紹介（土屋由香，愛媛大学）

(3) プランゲ文庫年度計画について



(3) 2013 年 5 月 8 日の研究会開催

場所―神奈川大学 17 号館 23 室

報告：(1) 報告：「戦後日本の賠償問題と歴史認識問題の起源」浅野豊美（中京大学，国際教養学部）

コメンテーター 尹健次，大里浩秋，孫安石，阿部浩己，小林聡明，泉水英計

(2) 中国・上海会議について

(3) 共同研究グループの趣旨説明「東アジアにおける民族主義の歴史的体験とその内容―『プランゲ文庫』を起点に考える」



(4) 合評会の開催『戦後日本と中国・朝鮮』（研文出版，2013 年）

日時—2013 年 7 月 3 日（水）

場所—神奈川大学人文学研究所会議室

報告：(1) 合評会コメンテーター：伊藤一彦（中国研究所 理事），何義麟（台湾・国立台北教育大学），王雪萍（東京大学），尹健次，大里浩秋，孫安石，阿部浩己，泉水英計，小林聡明（韓国・慶熙大学）

(2) 会議—2014 年開催の愛媛大学科研・日韓共同研究とのジョイント・シンポについて検討。



(5) 2013 年 9 月 25 日の研究会開催

「沖縄と日本・アジアを考える」

日時：2013 年 9 月 25 日（水）

(1) 『沖縄「韓国人慰霊塔」建立の背景と南北分断の現実』小林聡明（韓国・慶熙大学）

(2) 研究動向紹介「ジョージ・カー（George H. Kerr）と沖縄研究の周辺」泉水英計（神奈川大学）

(3) 「沖縄戦後史と沖縄人アイデンティティについて」波平恒男（琉球大学）

(4) 「沖縄出身台湾経験者と沖縄の「戦後」復興—教育の「戦後」復興と「復帰」運動の担い手たち」大浜郁子（琉球大学）

質疑応答：尹健次，大里浩秋，阿部浩己，小林聡明，泉水英計，孫安石



(6) 2013 年 12 月 プランゲ台湾会議のお知らせ

シンポジウム「戦後日本と台湾・中国について」(共催：日本神奈川大学プランゲ文庫研究会・台北教育大学台湾文化研究所)

日時：2013 年 12 月 6 日(金) 午後 1 時—6 時

場所：台北教育大学行政大楼 A605 会議

報告：(1) 戦後日本の台湾人留学生について(何義麟, 台北教育大学)

(2) 戦後日本と台湾史研究(鐘淑敏, 中央研究院台湾史研究所)

(3) 戦後駐日中国代表団と華僑(楊子震, 南台科技大学助理教授)

(4) 在日朝鮮人と日本共産党(尹健次, 神奈川大学)

(5) 日本に於ける中国関係雑誌記事目録 1945～49 年(大里浩秋, 神奈川大学)

(6) 上海の『亜細亞世紀』が見た戦後日本の政治(孫安石, 神奈川大学)

12 月 7 日(土) — 中央研究院近代史研究所, 台湾史研究所の資料調査

12 月 8 日(日) — 台湾 228 記念館, 国立台湾大学図書館の資料調査



国史館(写真中央)と總統府(写真右)

(7) 2014 年 2 月—共同シンポジウム「戦後東アジアにおける知の展開」

日程：2014 年 2 月 17 日(月)

会場：愛媛大学メディアホール

テーマ：戦後東アジアにおける知の展開

発表者（予定）：

- (1)「未定」鄭容郁（ソウル大学）
- (2)「未定」池貞姫（愛媛大学）
- (3)「未定」尹健次（神奈川大学）
- (4)「未定」大里浩秋（神奈川大学）

コメンテーター：阿部浩己，土屋由香，小林聡明，泉水英計，孫安石

共催：神奈川大学プランゲ文庫研究会・愛媛大学二国間交流事業共同研究

※本報告は共同研究グループ「プランゲ文庫研究会」の活動報告を兼ねる。

（文責 孫安石）

共同研究グループ活動報告（2013 年度）

（文責 深澤 徹）

日中関係史

13 年度の活動は、下記講演会の開催だけに終わった。

・高見邦雄氏（緑の地球ネットワーク事務局長）
「黄色い大地に広がる緑—日中草の根協力の 20 年」

他に、従来は日中関係史で取り組んできた研究会や講演会、シンポジウム等は継続して行った。例えば留学生史研究については、学内共同研究奨励金助成を得、戦後の在日中国人（華僑・留学生）に関する研究については、「東アジアにおける民族主義の歴史的体験とその意味」と題する研究の一部として同じく学内共同研究奨励金助成を得て別個に実施したが、それらに関する報告はそれぞれの報告にゆだねてここには記さない。また、中国における旧日本租界関連の研究は、非文字資料研究センターのグループ研究として行っているが、やはりここでは触れない。

ここで問題になるのは、一部の人が上記の数テーマに忙しそうに取り組むのみで、グループに参加する皆が集まり、各自が関心を持つテーマの紹介やら問題提起をする機会をこの数年開いていないことである。14 年度にはぜひ実行したいと思う。

（文責 大里浩秋）

東アジア比較文化研究会

・研究会の開催

日時：2014 年 2 月 19 日（水）17：00～19：00
場所：7-216

発表者：①深澤徹「謡曲「翁」のトポス」／②鈴木陽一「江戸時代（18 世紀末～19 世紀初）における日中文化交流について」

活動内容：時期的な制約もあって参加者は少数であったが、研究会メンバーの深澤と鈴木が連続して口頭発表を行い、活発な意見交換がなされた。

色彩と文化Ⅲ

1. 研究会

・日時 2013 年 7 月 30 日（火）17:00～19:00
・場所 17-215 室
・議題

(1) メンバー紹介

(2) 今後の活動計画

1) 具体的な研究テーマ

・色・都市・ひと

・禁色の研究

・世界における色のシンボル

2) 叢書の企画

3) 海外調査（東アジア、モンゴル、ベトナムを含む）

4) 講演会等の企画

5) 図書の購入

2. 活動報告

研究所長より当研究グループに叢書第 34 号の執筆の打診があり、それを引き受けることとした。執筆は三星が行うこととした。第 2 回研究会を 2 月または 3 月に開催する予定である。また 3 月にメンバー 3 人で多民族国家マレーシアにて民族の色彩について調査を行う予定である。

（文責 三星宗雄）

ブランゲ文庫研究

【学内共同研究奨励金助成グループ】

「東アジアにおける民族主義の歴史的体験とその意味—『ブランゲ文庫』を起点に考える」の報告書と兼ねる。

（文責 孫安石）

活字文化の研究

1. 講演会・研究会の開催：特になし（適宜、メ

- ンバー間での情報共有を行った)
2. シンポジウムの開催：特になし
3. 活動内容
- (1) 活字を通じた日本語教育と異文化理解（国際）に関する調査・研究
- (2) 活字文化普及のための教育・啓発活動（教育）に関する調査・研究
- （文責 松本安生）

〈身体〉とジェンダー

昨年度より始動した本研究会は、各担当地域における〈68年〉とジェンダーに関わる年表の作成と意見交換といった数回の研究会を経て、共通の問題意識を構築することに努めた。これに引き続き、本年度は個々の問題意識を深化させることに集中した。新たに新メンバーの加入もなされ、来年度は積極的に成果発表を行うことができればと考えている。

（文責 小松原）

自然観の東西比較

今年度の活動として、「研究設備の整備」を目的とした研究資料購入のための大型予算を、「自然観を基礎にした文化の東西比較研究コレクション」として申請した。

2012年度の2件の研究発表の後、2013年度は講演会と研究会を開催することはできなかったが、2014年度に向けて準備をし、少なくとも講演会を1回、研究会を1回開催する予定である。

また、「自然観の東西比較」に関するシンポジウムについても、準備をして開催する計画を立てる予定である。

（文責 伊坂青司）

近代都市の表象

1. 講演会・研究会の開催
研究会の開催を検討中
2. シンポジウムの開催
予定なし

3. 活動内容

近代の東洋ならびに西洋の諸都市の来し方や現況について、表象という切り口から分析を試みている。

数年後に人文学研究叢書を出版することを目標としている。

（文責：鳥越輝昭）

ヒト身体の文化的起源

1. 講演会・研究会の開催：

- ① 2014年3月上旬（予定）、村井昭彦（東京大学大学院情報理工学系研究科 研究員）「全身神経筋骨格システムの構築とその応用（仮）」

2. 活動内容

- ①人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I. 特に関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点について調査・研究を進めた。研究内容は2013年7月のThe Society of Experimental Biology Annual Main Meeting 2013（スペイン・バレンシア）の“Muscle-Tendon Interactions”というセッションで「How can the muscle be organized to accomplish tendon displacement at the calcaneus that are similar to the muscle fiber length?」と題する招待講演を行った。また、2013年6月の18th annual Congress of the European College of Sport Science（スペイン・バルセロナ）で「True identity to move the foot quickly」と題する一般発表を行った。

II. アキレス腱の機能を調べる一環として、ランニングの着地によるアキレス腱の長さ変化に関する研究を行っている。2010年1月の『Nature』誌に“日常的に裸足のランナーと靴を履いたランナーの足の着地パターンおよび衝撃力”と題する研究論文が発表された。裸足で走るランナーは、つま先の付け根に近い部分で着地し、足先と脚部が自然にバネのように動くため、足裏にかかる衝撃力が靴を履いたときよりも最大で70%も緩和されることが明らかになっている。こ

の衝撃力を緩和する人体内器官として、一つの可能性としてアキレス腱が挙げられており、ランニングの着地について再考する学術イベント（神奈川スポーツサミット）を2014年2月15日に本学で開催する。私達はこの学術イベントにおいて、ランニングの着地に関する測定ブースを開催する。

（文責：衣笠竜太）

帝国とナショナリズムの言説空間

1. 研究会の開催

第1回：7月3日（水）午後4～6時

場所：17-401号室

（横浜キャンパス・人間科学部社会コース共同研究室）

講師：泉水英計氏（本学経営学部准教授）

論題：「沖縄語りの切り替わる瞬間——言説空間の移動に伴うナショナリズム言説の複数性について」

第2回：12月18日（水）午後4～6時

場所：17-401号室

（横浜キャンパス・人間科学部社会コース共同研究室）

講師：村井寛志氏（本学外国語学部准教授）

論題：「非常事態時期マラヤのスクウォッター—再定住事業をめぐる言説空間」

2. 活動内容

今年3月まで活動した共同研究グループ「植民地近代性の国際比較」を引き継ぐかたちで、本年7月に発足した新しい共同研究グループである。2014年3月中旬には、共同研究グループ「植民地近代性の国際比較」のもとで編集された、永野善子（編）『植民地近代性の国際比較：アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』（御茶の水書房、2013年）の合評会を本学箱根保養所で開催の予定である。

（文責：永野善子）

講演会要旨

開催日：2013 年 11 月 6 日

会 場：神奈川大学 23-307

講演者：越智啓太氏（法政大学文学部教授）

演 題：「犯罪と心理の最前線の研究について」

犯罪心理学の中でも特にプロファイリングの現場の話や実際問題についての講演が行われた。

プロファイリングとは、犯罪捜査において、犯罪の性質や特徴から、行動科学的犯人の特徴を推論することを指す。統計学を駆使した行動科学の手法で、確率論的に可能性が高い犯人像を示すもので、捜査を効率的に進める支援ツールの一つである。犯罪の特徴、たとえば犯罪の種類、犯罪前の準備、犯罪の方法、犯罪の行動は、犯人の性格や個性にかなり関係すると考えられている。そこで、犯罪現場に残された手がかりを活用すれば、犯人の性別、職業、年齢、社会階層などの特徴をある程度推定できる。その推定をてがかりに捜査すれば、捜査がより効率的になると考えられている。

越智氏は警視庁科学捜査研究所で日本のプロファイリングの最前線にいた経歴があり、近著『ケースで学ぶ犯罪心理学』では実際の犯罪事例をもとに犯罪者の行動傾向を詳しく紹介している。TV ドラマの慣習や TV 番組のコメンテーターなども務めており、日本のプロファイリング研究・実践の第一人者の一人である。

越智氏によれば、プロファイリングの方法は大きく分けると二つの方法があり、それぞれの特徴と実際問題が紹介された。方法の一つは FBI がはじめた「秩序型」と「無秩序型」に分類する臨床的プロファイリングである。この方法では計画犯罪を「秩序型」、突発的な犯罪を「無秩序型」と分類する。研究方法は犯罪者への面接調査が中心で、研究者自身の個人的な洞察を多く含む方法である。もう一つの方法は、イギリスから始まった統計的プロファイリングでリバプール方式とも言われている。心理学と統計学をもとに確立させたのが特徴である。

日本では 1990 年頃から FBI 方式、リバプール方式のそれぞれについて研究が行われ、プロファイリングの弊害（プロファイルが犯人像の限定につながって逆に真犯人から遠ざかる、など）なども考慮しながら、よりよい活用について検討が行われている。

講演では最後に質疑応答が行われ、越智氏は聴衆者からの質問に時間を超えて対応してくれた。

（文責 杉山崇）

開催日：2013 年 10 月 24 日

会 場：23 号館 304

講演者：石原 悟（元コナミスポーツ会長）

演 題：フィットネス産業の成長プロセス

そもそも従来からのフィットネスクラブ産業は、施設内において健康や快適性を売るサービス産業として展開されてきた。昭和 50 年頃に日本で産声をあげた比較的新しい産業でもある。会員の定着率低下やサービスのマンネリ化などの課題が山積し、ここ数年間は成長が鈍化する傾向にあった。

演者の石原氏は、フィットネスクラブの草創期にピープル（後にコナミスポーツに買収）を立上げ、

その後 FIA（フィットネス産業協会）会長としてフィットネス産業界を牽引してきた。その経験から現状の課題と今後の展望について話しを伺った。

近年、健康志向を背景に中高齢者を中心に日本のスポーツ人口が拡大しつつある。さらに 2020 年東京オリンピックの開催が決定したことで、スポーツ産業全体に明るい兆しが見え始めた。五輪を見据えたインフラ整備、特に公共スポーツ施設が飛躍的に整備されることは確実だ。指定管理者制度や PFI 事業への参入など官民連携事業がスポーツ界にも大きな影響を及ぼし、フィットネス産業界にも大きなビジネスチャンスとなる。さらに地域活性化事業や街づくり事業への参入、福祉施設や高齢者施設との連携による新たな事業展開が模索されるであろう。そのためには、単なる健康づくり事業の専門家ではなく、社会全体を見渡せるマネジメント能力を持った人材の育成が重要だ。ここに参加の学生にもそのような人材として活躍してもらうことを期待したい。

（文責 大竹弘和）

所 員 自 著 紹 介

1. 書名：『戦後日本と中国・朝鮮—プランゲ文庫
を一つの手がかりとして』
2. 編者：大里浩秋
3. 出版社：研文出版
4. 出版年月：2013 年 3 月
5. ページ数：470 頁

この本は、わが人文研究叢書の一冊として陽の目を見たもので、2009 年から 3 年間、本学の共同研究奨励助成を得て行った「戦後、とくに GHQ 占領期における在日華僑・在日朝鮮人の生活空間を明らかにする—横浜市・神奈川県内の動きを中心に」と題する共同研究の成果報告書である。

プランゲ文庫とは、周知のごとく、GHQ が 1945 年から 50 年にかけて検閲機関を設けて日本各地で発行された出版物を提出させたが、その後それらをアメリカに運んで保存するのに尽力した人の名を冠してそう呼んでいるもので、その資料群（マイクロ）を本学図書館が購入したことをきっかけにして、その資料を利用して戦後の日本を様々な角度から研究しようと思い立って始めたのが私たちの共同研究となった。

といっても、自分の関心を持つテーマをプランゲ文庫だけを使って明らかにするのは不十分で、他の資料を探しに図書館通いをすることにもなったが、共同研究を組んだメンバーの関心からおのずと在日華僑や在日朝鮮人についての諸事情を調べ、それを報告し合って、今回の一冊にたどり着くことになった。以下は、執筆者とタイトル一覧である。

論文篇

尹健次「在日朝鮮人運動と日本共産党—階級か、民族か」

小林聡明「GHQ 占領期日本における朝鮮人メディアの世界—機関紙と雑誌に関する書誌的分析」

王雪萍「戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤—救済金問題を事例

に」

何義麟「戦後台湾人留学生の活字メディアとその言論の左傾化」

陳祖恩「戦後上海日本資産の接収と処理」

孫安石「上海の『亞洲世紀』が見た戦後日本の政治」

朴晋雨「日本の新聞・雑誌にみる昭和天皇の戦争責任」

田畑光永「吉田書簡から日中共同声明へ—捨てられた先達の苦心」

資料篇

小林聡明「在日朝鮮人刊行雑誌（朝鮮語）記事リスト」

田遠「終戦直後における中国人日本留学生に関する年表」

大里浩秋「日本に於ける中国関係雑誌記事目録 1945～49 年」

（大里浩秋）

1. 書名：『植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』
2. 編者：永野善子
3. 出版社：御茶の水書房
4. 出版年月：2013 年 3 月
5. ページ数：308 頁

日本ではこの 10 年間、朝鮮史研究を軸として「植民地近代性」について多くの議論が展開されてきた。さまざまな解釈が可能であるものの、一般論として、「植民地近代性」の概念は、植民地的要因が植民地時代に限定されて存在するのではなく、植民地以後にも残滓として各社会の底辺を形づくっている点に着目している。「ポストコロニアル」という概念が、こうした植民地遺制の否定的側面を強調し、それからの脱却の道を模索する思考様式をもつものに対して、「植民地近代性」の概念は、植民地時代に外部から導入され、あるいは新たに創造された諸要因が、独立後に各社会

における自律的要素として自己展開し、その社会の中核的構造をかたちづくっているという現実を直視する。したがって、植民地近代性とポストコロニアルとは、ひとつの事象に対して相反する特徴を照射しているが、いずれもポストモダンの影響のなかで歴史学のなかに持ち込まれた概念であるという意味で共通性がある。

本書は、こうした問題意識のもとで、「帝国」、「植民地主義」、「ナショナリズム」、「国民国家」、「脱植民地化」、「エスニシティ」などの議論と接点をもちながら、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸地域における植民地近代性のありようについて実証的考察をおこなうことをめざした共同研究の成果である。本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章：親日であれ親米であれ我が郷土——植民地台湾で育った米軍政下琉球の沖縄行政官 泉水英計
- 第2章：脱植民地化の課題と左翼ナショナリズム——金斗鎔の場合 尹 健次
- 第3章：抵抗の歴史としての反米ナショナリズム——レナト・コンスタンティーノを読む 永野善子
- 第4章：植民地期タガログ語短編小説にみる教育と近代——農村・学歴・植民地都市 岡田泰平
- 第5章：非常事態時期マラヤにおける植民地的／冷戦的近代化とその横領——スクウォッター再定住事業と植民地政府、華人有力者、地域住民 村井寛志
- 第6章：相互行為としての制度——タイ農村における研修と選挙の集まりの場から 高城 玲
- 第7章：タイ近代性としての小農的世界——タイ東北部市場における米の価格形成の問題を中心にして 菅原 昭
- 第8章：アフリカの植民地近代性——「宗教」の侵入について 中林伸浩
- 第9章：スワヒリ語による国民国家建設と植民地近代性論——その可能性と不可能性をめぐって 小馬 徹
- 第10章：ラテンアメリカにおける西欧中心主義

近代化思想の克服——ボリバル、マルティ、キューバ、ボリビア 後藤政子
(永野善子)

- 1. 書名：『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在（いま）—』
- 2. 著者：中島三千男
- 3. 出版社：御茶の水書房
- 4. 出版年月：2013 年 3 月
- 5. ページ数：119 頁

神社と言えば日本国内だけに建てられたものだと思っている人は結構多い。しかし実は、近代日本において、日本人の海外進出や大日本帝国の「勢力圏」の拡大に伴って、海外に多くの神社が建てられた。これらの神社は「海外神社」と呼ばれ、現在判明しているだけでも 1600 余社にのぼる。その大部分はアジア地域、日本の「勢力圏」に建てられた神社であるが、言うまでもなく、これらの神社は 1945 年の日本の敗戦、「大日本帝国」の崩壊とともに、その機能を停止した。

この海外神社研究そのものは、1990 年代以降、国内外で急速に進んでいったが、本書は海外神社そのものの研究ではなく、その機能を停止した海外神社（跡地）が、半世紀以上を経た現在、アジア各地にさまざまな景観を変容させて、多様な形で存在していることを初めて網羅的・体系的に明らかにしたものである。

さらに、その多様な景観変容の要因を分析することにより、海外神社（跡地）の現在の姿は、たんに過去（戦前）の残影、残滓というよりも、当該地域・国の日本との関係を含めた、現在（いま）をあぶりだすものになっていることを明らかにした。

なお、本書は本学が 2003 年から 2007 年にかけて文部科学省によって採択された 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果叢書（神奈川大学評論ブックレット 37）として刊行されたものである。

(中島三千男)

1. 書名：『ダイムノヴェルのアメリカ 大衆小説の文化史』
2. 著者：山口ヨシ子
3. 出版社：彩流社
4. 出版年月：2013 年 10 月
5. ページ数：388 頁

本書は、19 世紀後半から 20 世紀の初頭にかけてのアメリカでとくに人気の高かったダイムノヴェル（10 セント小説）を分析したものである。「低俗」といわれて消えてしまったこの廉価な大衆小説群の特徴を分析し、歴史書などには表われない、物語をめぐるさまざまな裏面史や周辺史を掘り起こすことで、アメリカ社会の底辺に蓄積された庶民の文化的営為の実相に迫り、アメリカ人に形成された集合的意識を探ろうとするものである。

ダイムノヴェルの出版形態がそれ以前の小説と異なったのは、規格化され、シリーズ化されて、大量にでまわったことであるが、これは、アメリカの産業資本主義経済のシステムのなかに、物語本が消費されるべき商品としてとり入れられたことを意味する。安価なパルプの製造、印刷技術の革新による再版工程の簡略化、輸送機関の拡充などにもなう販売経路の整備など、廉価な物語本の出版と販売を可能にする科学技術に支えられ、出版社は、工場で商品を生産するように、同じパターンの物語を次つぎと出版し、より多くの読者に関与させるべく戦略を編みだした。一方、消費する商品のように次つぎと同じパターンの本を購入し、気軽な娯楽として読書を楽しんだ大勢の読者は、そのような読書をとおしていわば集合的な意識を形成するようになる。携帯に便利な小型本の出現で、いつでもどこでも個人としての読書が可能になる一方で、規格化された本を読み続けることで、大勢の読者が同様の意識を形成することになったのである。ダイムノヴェルを現代に読む意義は、一つに、その影響が、アメリカの人種差別や性差別などの意識構造の基礎として、時代をこえて現在まで続いているという現実を確認することにある。

本書は、アメリカ国家の重要案件事項といえる

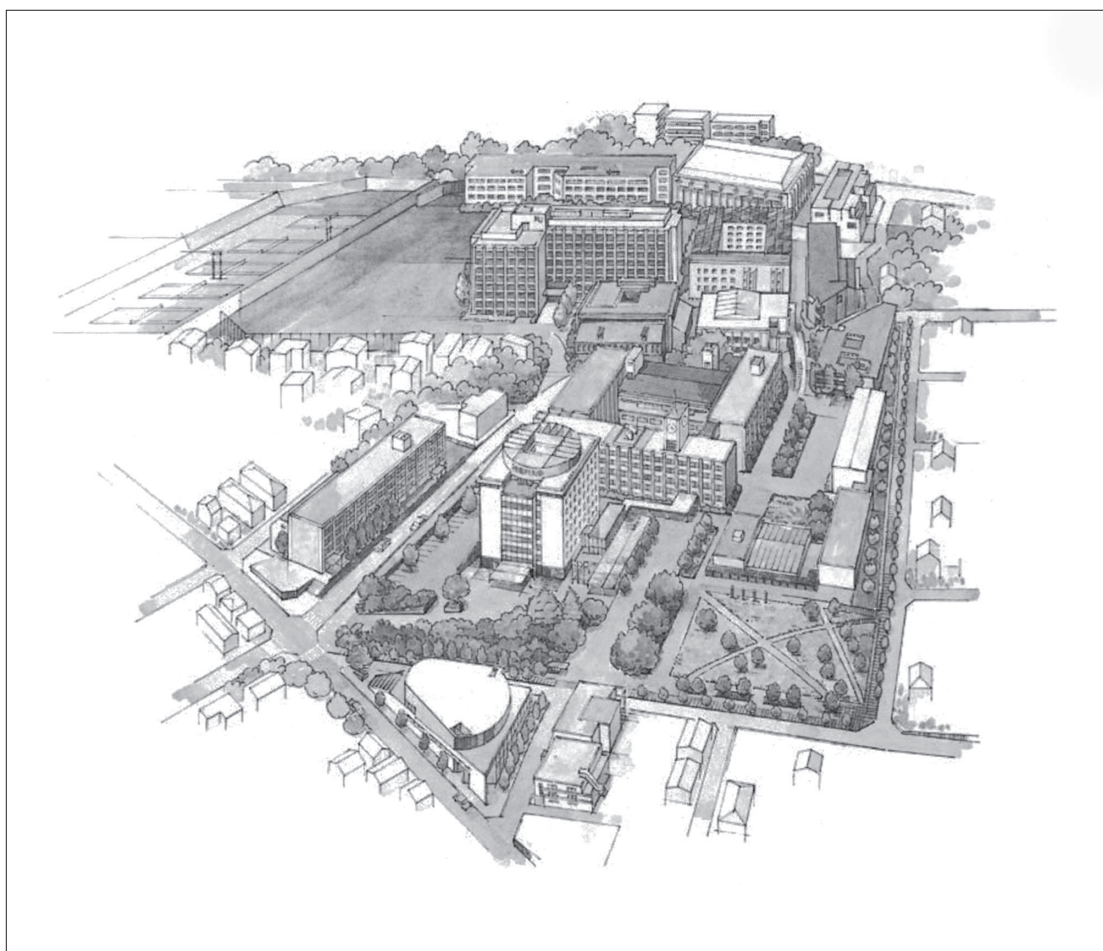
先住民問題や奴隷問題を扱った初期のダイムノヴェルから、とくに少年読者を熱狂させたといわれるウェスタン・ヒーローもの、探偵小説、サイエンス・フィクション、そして「ワーキングガール」と呼ばれる都市の白人女性労働者に向けて書かれたダイムノヴェルまで、それらを「ネイティヴ・アメリカンからワーキングガールまで」をキーワードにしてまとめたものである。

（山口ヨシ子）

神奈川大学 人文学研究所

The Institute for Humanities Reserch

Kanagawa University



◆人文学研究所の事業

人文学研究所は1963年、人文学研究領域相互の活発な研究活動を支援することを目的に神奈川大学の附属研究機関として設立されました。

人文学研究所の主な活動はつぎの4つです。

- (1) 人文学に関する研究および調査
- (2) 研究資料の収集および整理
- (3) 研究及び調査成果の発表のための刊行物の発行
- (4) シンポジウムや講演会の開催

人文学研究所は人文学系の各種テーマによる共同研究グループの共同研究を大きな柱に、様々なシンポジウム・講演会を開催し、また、『神奈川大学人文学研究叢書』を刊行するなど多彩な活動を行っています。

◆人文学研究所の研究活動

人文学研究所の基本的な活動は、共同研究グループによる調査・研究活動と国外研究機関との学術交流の二つに分けることができます。本研究所創設以来、活動を展開した共同研究グループは総数30グループ以上を数えます。

【共同研究グループ一覧】

	名 称	研究テーマ
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題
2	東アジア比較文化研究会	沖縄・台湾の島嶼を中心に、その周辺地域の文化の比較研究
3	色彩と文化Ⅲ	色の記号—自然・言語・文化の諸相—
4	神々のコスモロジー	世界と日本の宗教に関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。
5	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 言語政策と言語変異 3. 言語教育と言語変異
6	ブラング文庫研究会	神奈川大学図書館が所蔵するブラング文庫の研究を行う。
7	活字文化の研究	1. 活字を通じた日本語教育と異文化理解（国際） 2. 活字文化普及のための教育・啓発活動（教育） 3. 活字文化普及による社会環境への影響（社会）
8	グローバリズムに伴う社会変容と言語政策に関する包括的研究	東アジアにおける自国語を対象とした言語政策研究。 移民先進国における言語政策。
9	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象の変容と、その文化的・社会的メカニズムについて、なかでも特にジェンダーという視点に着目しながら多様なテキストをもとに考察する。
10	自然観の東西比較	1. 神と自然についての歴史的・思想史的な東西比較 2. 風土についての比較文化論的考察
11	近代都市の表象	夢と幻滅を伴いつつ近代化し、快適さとともにさまざまな問題を生み出してきた欧米・東アジアの都市について、どのような表象が、どのような諸力と関連しながら提示されてきたかを検証する。
12	越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研究を行う。
13	ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。
14	帝国とナショナリズムの言説空間	東アジア、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカ地域におけるイギリス、アメリカ、日本の帝国支配とナショナリズムの交錯の様相を把握しつつ、それらが今日においてどのように語られてきたのかについて具体的に考察する。

◆人文学研究所 2013 年度講演会

	開催日	講演者	テーマ	肩書き	場所
1	7月5日(金)	篠原淳子	「発達障害」再考	NOP 法人あではで神奈川所属	20-119
2	7月18日(木)	西脇威夫	スポーツ代理人の仕事、スポーツと法の関わり —契約、スポーツ事故等—	西脇威夫法律事務所	23-304
3	7月23日(火)	斉藤 充	非行少年の更生への手助け —子育ては愛し夢見せ泣き笑い—	家庭裁判所補導委託先	8-14
4	7月24日(水) 人文学研究所 50周年記念	岡島千幸	人と人の結びつきの在り方—世間と社会の比較研究	神奈川大学名誉教授	17-215
5		小林一美	毛沢東崇拝から尖閣列島問題に至る、わが中国史研究の 50 年		
6	10月23日(水)	潘 建国	人文学と東アジアの文化交流 —中国古典小説と版本—	北京大学文学部教授	20-452
7	10月24日(木)	石原 悟	フィットネス産業 —成長のプロセスと今後の展望—	元コナミスポーツ会長	23-304
8	11月6日(水)	越智啓太	犯罪と心理の最前線の研究について	法政大学文学部	23-307
9	11月21日(木)	青木恵子	ギリシャの観光政策	ギリシャ政府観光局	20-310
10	12月5日(木)	Helgason・Jon・Karl	The Forking Paths of Eddas and Sagas	Unversity of Iceland	17-216
11	12月12日(木) 人文学研究所 50周年記念	武内道子	うそと皮肉はどう違うか —ことばの使用から心を見る	神奈川大学名誉教授	17-215
12		後藤政子	ゲバラはなぜボリビアで死ななければならなかったか？ ～ラテンアメリカ—20 世紀から 21 世紀へ		
13		石井美樹子	イギリスルネサンスの人文主義と女子教育		
14	1月28日(火)	工藤庸子	工藤庸子とひも解くいま読むベロー「昔話」	東京大学名誉教授	20-417A

◆学術交流とシンポジウムの開催（2002 年以降）

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「21 世紀—マルクス歴史学は死んだのか」：神奈川大学・横浜キャンパス 2001 年 12 月 1 日

◇台湾・香港・上海の大学・研究機関との意見交換 2002 年 11 月 5 日～11 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

「アジアのポップカルチャーと日本」：神奈川大学・横浜キャンパス 2003 年 11 月 2 日

◇浙江大学日本文化研究所・中国日本史学会主催

国際シンポジウム「道教と日本文化」：中国浙江省杭州市内 2004 年 11 月 5 日～6 日

◇神奈川大学人文学研究所・人文学会共催

国際シンポジウム「世界から見た日本文化—多文化共生社会の構築のために—」：神奈川大学・横浜キャンパス 2005 年 11 月 11 日, 12 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化—近世から近代へ」：神奈川大学・横浜キャンパス 2007 年 11 月 17 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「表象としての〈日本〉近代ヨーロッパの場合—神奈川大学・ヴェネツィア大学学術交流の現場から—」：神奈川大学・横浜キャンパス 2009 年 10 月 3 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「ヴィジュアルとグラフィックの語り」：神奈川大学・横浜キャンパス 2010 年 8

月 24 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「越境する比較文化」：神奈川大学・横浜キャンパス 2011 年 6 月 11 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「スタニスワフ・レムについて」：神奈川大学・横浜キャンパス 2011 年 6 月 18 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「Reform, Reuse and Recycle: Comparative Literature Perspectives on Adaptation」
(リフォーム, リユーズ, リサイクル：比較文学の視点からみる改作)：神奈川大学・横浜キャンパス
2012 年 6 月 16 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

国際シンポジウム「東アジアの日本研究の現状と未来」：神奈川大学・横浜キャンパス 2012 年 12 月 1 日

◇神奈川大学主催

国際シンポジウム「Transform, Transfigure, Transcend: Translation in Cultural Studies」
(変形, 変容, 超越—カルチュラル・スタディーズと翻訳)：神奈川大学・横浜キャンパス 2013 年 6 月 15 日

◇神奈川大学人文学研究所主催

学術講演会「人文学研究所設立 50 周年記念」：神奈川大学・横浜キャンパス 2013 年 7 月 24 日

人文学研究所共同研究グループ一覽

		2013年度			
名	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題	大里	大里・中島・松本・日高・山口(建)・鈴木(陽)・彭・孫・村井(寛)・(非)吉川・楊・梁・呉・[学外]王・見城・周・易	17
2	東アジア比較文化研究会	沖繩・台湾の島嶼を中心に、その周辺地域の文化の比較研究。	深澤	深澤・山口(建)・彭・孫・大里・小熊・尹(亭)・渡辺・前田(穂)・鈴木(陽)・小島・上原・[学外]廣田・[経]佐野	14
3	色彩と文化Ⅲ	色の記号—自然・言語・文化の諸相— 世界と日本の宗教に関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。	三星	三星・尹(亭)・久田・彭・新木・堤・[理]長・[学外]加藤・[経]田島・[非]畑田・高・車(香)・[学外]山本・小林・車(貞)・林	16
4	神々のコスモロジー	世界と日本の宗教に関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。	寺沢	寺沢・小島・山口(建)・尹(亭)・新木・[学外]新垣・[非]鈴木(彰)	7
5	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 言語政策と言語変異 3. 言語教育と言語変異	彭	彭・松村・加藤・[非]鈴木(進)・張・山村・陶	7
6	ブラングケ文庫研究会	神奈川大学図書館が所蔵するブラングケ文庫の研究を行う。	孫	孫・大里・村井(寛)・尹(健)・[学外]泉木・阿部・[学外]小林	7
7	活字文化の研究	1. 活字を通じた日本語教育と異文化理解(国際) 2. 活字文化普及のための教育・啓発活動(教育) 3. 活字文化普及による社会環境への影響(社会)	松本	松本・新木・駒走・小松原・坪井・間山・尹(亭)・高木・[非]和美	9

名	名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
8	グローバリズムに伴う社会 変容と言語政策に関する包 括的研究	東アジアにおける自国語を対象とし た言語政策研究。移民先進国におけ る言語政策。	現代日本の言語政策、法制度の検討。 国内における言語政策の調査。 東アジアにおける自国語を対象とした言語政策。 学内における公開研究の実施。 叢書の出版。	富谷	彰・孫・曉・アリン・富谷・細田・横倉・ 〔非〕近江	8	
9	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象 の変容と、その文化的・社会的メカ ニズムについて、なかでも特にジェ ンダーという視点に着目しながら多 様なテクニストをもとに考察する。	1. 研究会、講演会などにより、テーマに関する共通認識を深め る。 2. 研究成果を積み上げ2年以内に叢書としてまとめる。	小松原	小松原・山口(ヨ)・笠間・村井(ま)・ラ ットクリフ・土屋・熊谷・ウェルカー	8	2014年 予定
10	自然観の東西比較	1. 神と自然についての歴史的・思想 史的な比較研究 2. 風土についての比較文化論的考察	1. 研究会の開催(9月) 2. 講演会の開催(11月)	伊坂	伊坂・上原・小熊・坪井・鳥越・前田・村 井(ま)・山本	8	2016年 検討中
11	近代都市の表象	夢と幻滅を伴いつつ近代化し、快適 さとともにさまざまな問題を生み出 してきた欧米・東アジアの都市につ いて、どのような表象が、どのよう な諸力と関連しながら提示されてき たかを検証する。	研究会、講演会などにより共通認識を深め、2015年度に叢書 を出版することを目標とする。	鳥越	鳥越・熊谷・小松原・鈴木(暢)・土屋・日 高・平井・村井(寛)・山口(ヨ)	9	2015年 検討中
12	越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研 究を行う	毎年6月に国際シンポジウムを開催し、ワークショップの活動 の中で研究論文集の計画を練る。2013年度の叢書出版を予定 している。	ラットク リフ	ラットクリフ・村井(ま)・ブッヘンベルゲ ル・〔非〕前島	4	検討中
13	ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根 源を考察することで、身体が持つ機 能的な意義を検討する。	研究テーマに関連した調査・研究の継続実施。 2014年2月に“走る”ことを題材にしたシンポジウムを開催予 定。	衣笠	衣笠・太田・宮崎・山下・〔非〕鈴木・塩田 ・〔学外〕大金	7	無
14	帝国とナショナルリズムの言 説空間	東アジア、東南アジア、ラテンア メリカ、アフリカ地域におけるイギリ ス、アメリカ、日本の帝国支配とナ ショナルリズムの交錯の様相を把握し つつ、それが今日においてどのような に語られてきたのかについて具体的に 考察する。	年2回程度の研究会を開催する。	永野	永野・土屋・泉水・梅崎・村井(寛)・小島 ・久田・後藤・高城・〔経〕山本	10	

〔名〕名誉教授 〔非〕非常勤講師 〔学外〕学外研究者

神奈川大学人文学研究所叢書一覧

人文学研究所

	年度	タ イ ト ル	出 版 社
1	1983	悲劇 ―その諸相と人間観―	神奈川新聞社
2	1984	日本文化 ―その自覚のための試論―	神奈川新聞社
3	1985	続 日本文化 ―伝統と近代化の再検討―	神奈川新聞社
4	1986	民族と国家 ―国際関係の視点から―	神奈川新聞社
5	1987	「近代」の再検討 ―ポスト・モダンの視点から―	神奈川新聞社
6	1988	いま、日本と中国を考える ―日中比較文化論―	神奈川新聞社
7	1990	「民族と国家」の諸問題	神奈川新聞社
8	1991	ロマン主義の諸相	神奈川新聞社
9	1991	インディアスの迷宮	勁 草 書 房
10	1992	聖と俗のドラマ	勁 草 書 房
11	1994	秘密社会と国家	勁 草 書 房
12	1995	ヨーロッパの都市と思想	勁 草 書 房
13	1996	国家とエスニシティー ―西欧世界から非西欧世界へ―	勁 草 書 房
14	1997	芸能と祭祀	勁 草 書 房
15	1998	笑いのスコモロジー	勁 草 書 房
16	1999	ロマン主義のヨーロッパ	勁 草 書 房
17	2000	ジェンダー・ポリティクスのゆくえ	勁 草 書 房
18	2001	日中文化論集	勁 草 書 房
19	2002	歴史と文化の境界	勁 草 書 房
20	2003	「明六雑誌」とその周辺 ―西洋文化の受容・思想と言語―	御茶の水書房
21	2004	新文化のかたち ―言語・思想・くらし―	御茶の水書房
22	2005	中国における日本租界 ―重慶・漢口・杭州・上海―	御茶の水書房
23	2006	世界から見た日本文化 ―多文化共生社会の構築のため―	御茶の水書房
24	2007	在外外国人と日本社会のグローバル化―神奈川県横浜市を中心に	御茶の水書房
25	2008	表象としての日本 ―移動と越境の文化学―	御茶の水書房
26	2009	ジェンダー・ポリティクスを読む ―表象と実践のあいだ―	御茶の水書房
27	2009	中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産	御茶の水書房
28	2010	世界の色の記号 ―自然・言語・文化の諸相―	御茶の水書房
29	2011	〈悪女〉と〈良女〉の身体表象	青 弓 社
30	2011	グローバル化の中の日本文化	御茶の水書房
31	2012	植民地近代性の国際比較	御茶の水書房
32	2012	戦後日本と中国・朝鮮―プランゲ文庫を一つの手がかりとして	研 文 出 版